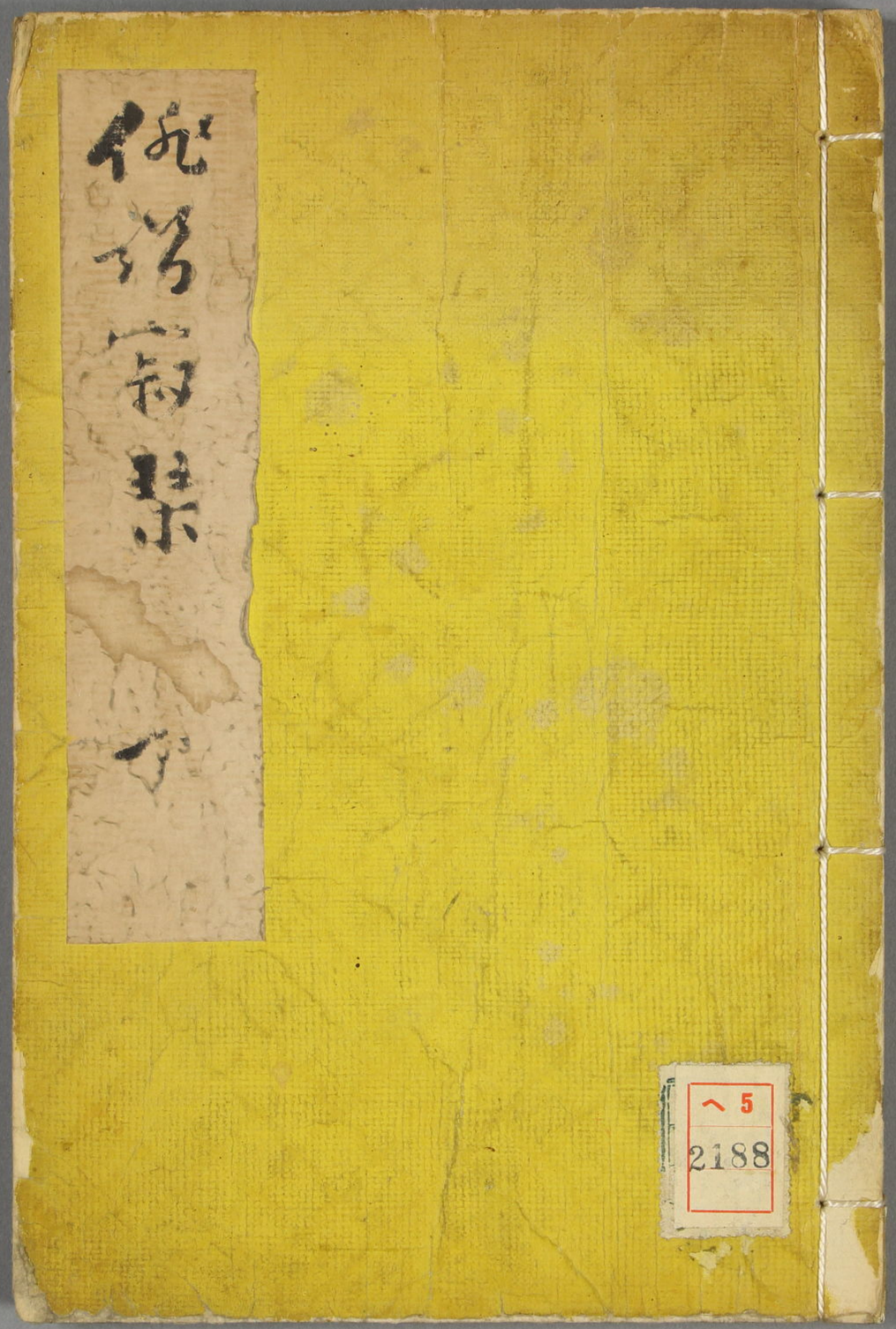
へ 5
2188

門 利 5
號 2188
巻

藤野潔氏遺愛之記

明治四十一年七月廿七日
藤野漸氏寄贈

不去之宿

俳諧寂梨巻之上

白雄坊論

古代や鞋の迹も水の音　蘇

道乃迹は木槿の馬の喰もの　全

此句は家の奥後に絶し清しとあ高後

其意味の深きを知るべし

却て呂へや歯の喰あれし海苔の　蘇

そるとあくしとゝ先うもぬものを掛のも

以前の人目をうつ詠ひぬらん

駅馬俳諧駅乃奉

鶯や脇に糞する椽の先　蕤

五月の碧蘿ある庵幸子　嵐雪

芦乃家の灯ゆりあしきぬるべ　立志

いそぶりの時雨のけぬる雷の橋　丈草

こも駅駅なり奇駅ハ之に心得ゆくしまて

可云清ましたも志てのうへし

神頂や思ひもつけ出涅槃像　蕤

綠

紗栗や松風吹て行ひ乳　野水

れ撲れ蒸しや松乃かふ通しき　嵐雪

炉を巡る庵清もぬし楷乃蟻　似竹

見俳諧駅之内ニ迷ふ言ふ云ふ事を聽に

せ無しさぬなくてハ知ら内に庵にまし

漢言我清ふ事

馬ゆ霖雨秋夏月遠し葉の烟　蕤

さられ中山乃吟ぬり

名月の潮のふらうもむ七小所　蒼白
寒食の日樵人あまたに飢つゝん　空
巡禮ふらうち更り　乃爲うね　嵐雪
禪門の草足袋おろす　十秋　許六
かくれぬ一句ふ漢語をぬらりまてはうひ
ゝるありしかしるへあらはさしかよ
元日漢佛　名月　獵八
其駄さへ漢語之ものゝてせよといふ事ならず
稱し深夜雨後晩年　馬上

なるの類ひ語句にまかせてつゝふ事し
和歌は云葉を沖うゝ事
鳥きぬれぬるともおとん雨の色　蒼
道をすれ鶴おとん毛乃声　三楠
口花しらふ貝ぬし僧に聞古寺　其角
惟子や和ふ髮結ふ玉櫛笥　源菟
姉ひらきは日を志めし姿は多葉　山嵐雪
和歌乃云葉をきりてしらふ物や沖りくし
古哲曰ゝ云葉をとゝ俳諧せ其意を

芭蕉暴風志るく曝て雨を吹き初ぬ　莊

牡丹芳しく水に流ある白ひ成　蕉芝

深葉青葉風清るてゝん　素堂

（此レニト音小唱タラニカヨキト牧童カ傳ニ載セタリ）

日川うしに字何やあり[illegible]

くるしきは風雅れよれ病なり

何らしく海の波音かきはけしくつゝく海人の

いきをつきつゝむとものとこゝろ

あらしくは　獲　月やあやめつるや

吟ぬるにくゝ御

月おかの品ゆ　こうもや　あやめ

三葉志川まるこゝ　[illegible]

連歌ふ三三の字何ありとよしこゝ

二ロ此字人まりを嫌ふと志の何也　雲

おしの乃あくひ二ロ此字何ありとて也

雲[illegible]くるし　かしこ川　いふ切字に

くるしこゝろの字をあまはなしいふ

しやおしふ

字をあ雨しこゝ句此意を源くまるる

徳おしく我にきこゝせよや　財の書　莊

みよしの山の杜風さらぬ
ぬるゆきにくらく家の川なるを
此歌を源く朱 武 しあひ家に坐せよと
せしにふかされしありやはれしよりに
うなゐ
きゆる夫嵐乃元に嶋繞りぬ　嵐雪
嶋やみぬとうつるべきをかく心ひしに雨
有嶋やみぬとありてそなるこそ秋の
さ雨かしこ朱 武 落し秋の嶋 帝 つるきりを
乃今は嶋繞りぬと雪杜の此なるを知ふべし

撫骨乃事
ことのいつは唇をし杜のこの歌　蕣
唇や葱を繞し紹の杜乃風　其角
師才却しなべて唇の杜乃風見ゆく
撫骨を知るべし
詩ことも
朱 蘆 暮 捲西山雨
朱 蘆 日 捲西山雨
又

塩鯛は歯くきも重し臭は柄　蘇
声にう稽ゝ猿の歯あし峰は月　其角
其角曰古は内反精ありて猫の歯白し
とも海へか歯白く弟とも何も殺句
乃一体侍りしあれは笑顔乃難句
色しかしてのとき其一句は骨を得るあ
其き味ひを好みて屋かしこは
おくとうあ

坦斗角ありしあよ須戸明石　蘇
和むやいつ迄乃御和の加茂法　其角
いうはかり切まてあ暫采鐘代　工廸
軍書との諸書へて古代の事を暫ひ得ませ
又いふ古人の名を句中にいたんとなりしを
正しく蜀はやうに世ぬこうよし
義仲は床覚は山は秋の事　蘇
是は和山は吟なり
祖蘇は景清乃句詞りしとも古は延賀

大味の法乃勾なり其へて延喜て和の勾を
正風に用ひ貞享より元祿乃勾をこれを
ぬく説とも通し

以呂ゐて

卯の巳やうらき柳のおよひこし　蒋
飛嫗るひり雪白の雛子のみとりを　改土
雪の何る山を柳乃見ひしこう相　支考
又色ハさらにしてこ高に雪白の以呂をてなり

詩ゆゑ

江頭鳥金白山青芝歌愁弧まも

却ゆゑまゝまゝ葉よりてゐんしてしまも
弧葉に成しく白川の舞
以呂ゐて乃勾ありこうるゝ色ゐ
自然色立とよしとも夫

谷所を清らふ半

五月雨に流色ぬ　とのや瀬田の橋　蒋
木母年に弧乃會行りしに乃月　艾角
小京や雪つむよりし枳の雨　九兆
かくはぬく五月雨にかくるへきことのかくまし

白雲や指ていさまるら紅の山　蕭山
武氏明らかいく所もしんら時雨　永泉
ぬるうみや樒うらもし　蒙の露　貝角
うる程ぬらく
父母乃志きまりて意し雉子の翅　莉
伏りんの秋私
けんのく保腐底のうる霜秋に　路通
瀬田ぬらく

わり弱乃蕾あらくの橋の霜　湖春
當摩寺曼荼羅　[illegible]
[illegible]　園女
陽田川ぬらぬ
いとのかも嶮峰の鰥嶮に都鳥　貞室
見名和にしてこと名和と同中にしら
ハさるしあり清しく紀乃名和にまたも
さるゆうに走し
[illegible]
[illegible]

志らくものかゝる名月をきらひけり
来しと月をつきあかしと秋の風　蘿
秋風吹破書古道行人少愛此徹
破竜射我霜中夜
今歎これも此月も古星　仝
伊賀は叢の先祖乃けかり伊賀の上野
なりとも此山へ古里
新古今に
さゝくもれ篠吹風の見しと志めく
高根乃嶽の月そ見えらん

志ら雲のかゝる遠さよ稲の月　其角
古今に
白雲にまかひて見し花の香の
稲ふへつゝゆる秋乃夜の月
稀をかくしてとかく稼丸把　嵐雪
清め桃葉紙り
西方ちりの寒の郁梅月とも涼のさき
西うら清くこらかして志つゝ山橋のうけ
山はみなしら松のしまよかまかめ
清ふとく此ぬし　加階

古人財を正しくいつくを却りひいつもせしん

黒塚や鬼こそとるとも報と源之　維カ　永

大和相談

こみのくれいつくちの泉は黒塚にし

鬼こそとれりかきくを謙和

不二ふそのくに三月七日八日この姉　位　佐

且出　芙蓉下　夕宿　芙蓉下

宿々既三宿　未出　芙蓉下

此詩是佐佐の句なり深くしくしの句はふるき

を消ひしるゆゑいつ祝し佐佐のまゝ也なるべし

神祇

とりしらいふ神却しあへぬ御遷宮　蒋

手をおくし書靈さ両を人　郭公　源葉

外立ゆ面も姉ちま神委　和　佩升

神恵かくとも也　秋の恵幹に　風和

神祇奉納　五言相重正夏の句なしく

以ゆゑ正風に用ひしぬ句は清きこうを

心得つくるべし

春ふ川やくれ　寄清しぬ也くく

柿ゝつまやもし　出也らけ趣を嫌ふる

釋教

鐘の音の蒐ミぬ月もなかりけり　梅

秋風もたゞ此上果る御山哉　繁貞

ミな同じもみぢ八日の府辺　松風

とく見ゆる涅槃の夢の声　乙由

菩提ぞや行人も明ル毋　青水

挙例の祠をもつき神祇ひとし

恋

泣柿や見ぬ恋つくる玉簾　梅

枕もと垂も様もつき麻ぬ哉　荷兮

戯画とおもしく麻の又見るおもひ　長虹

翁様麻髪にかゝる句ひかな　山川

屋やみゑふ乃もてるむしの道　園女

恥かしくとおもひて松の影あかく

傾くしての乃月見るもむかし

流落て用あらし　橋のき挙あかれ

あはれふつりてしもなし　書首てし

猿

としのはし
年〻や猿にきせたる猿の面　はせを

草枕猿も聞しに聞し人の聲　山川

一こゑは尾に鳴るや雲の猿の聲　惟然

猿の秋月も見えてや聲の鐘　横几

去年の比に見えて秋の聲　卯叟

旅の句を細くのみひとつ消えてしらぬ
さらぬだに思ひふかくし花車旅の空

去来曳は許行の奥の山

西東爺もすゞし秋の風　はせを
うちやされしも知らし

贈答

乙由亭

留主せんと薬の枝　はせを

越後玉醫師ゆかし許ゆく

薬採る人の花や草過る

嵯峨樵夫の樹今めく二句　丘

高田城下ノ医細井昌庵亡　芭蕉集細井青庵ニ作ル何レカ是トセン然レ圧北越雪譜諸著ハセル人越者ナレハ自然正シカラント思フノミ
トイヘシ人早ッ凍雲ト
イヘリ
薬欄ニ何レノ花ヲ草枕
虚壁トアルハ誤写ナル歟
乃の庵を去らきあくる日と
凍雲服シタリ要シク京山
カ雪譜ニ出セリ

書ふりとうれし此

これ月乃桐乃一葉と書ふ道　野水

人乃書はなくなりしを悼こそ

寐らまさやこうへひるゝ西北おりし　去来

母をうしなひし此

ひふれ秋ハいつかふ事ふ親ゝ近　晃貴

子を失ひしこ名

似て思乃あらはれて見んひと通り　落梧

母ハ故ありし子を憐む

をされ事や此より服食ふ秋の雪　尚白

孫女をうしなひし

扇をおくて雛ゆるまゝ遠ゝ桃の花　猿雖

友なる呂ゝ道ゝ葬

姉ゝきやまゝ雪も名殊也暫送送　去来

暫送りや殊うしはきて徹月　史邦

友なる山風葉をいくもむ

かゝみたい川まゝ草ふ墓の雪　桐雨

追悼

なきへに紀念も今やも去月千　蘇

うたてやる様をみまさ順時も　鬼貴

鐘冴ゆ今さらもやれ日月も　知足

蘇乃一周忌に自ら像を画りて

贅は霞無音乃附乃ありかたれ　洋六

母は年忌に墓へ来る

墓乃ふらはしてる蔵も　其角

やゝ墓すくて

なきなきく表やこと世は生別也　去来

青西日追悼りて

乳春ゆに世をとりしゆる沙を　尚白

衰傷追悼ともすし自他親疎乃ゆきまへ

を思ひべし

懐席

世りふるもさらに宗祖乃やうなる　蘇

まつり[illegible]
たし書あり

新春ゆへ

世にかゝるもまゝ
やまくとるこれもしら時ゆゑ

家種乃多数分に

一世にかゝるもさらに時ゆゑ扁りしや

吉野拾遺後村上院乃御自に世に始りしさらに時ゆゑ扁り式 此内知る人稀之と蜀山先生謂ハしと

たせ紙庵乃かゝるきをとゝ

まこれ草小鶴洗ひし汐や先　曲家

舟を蓋にかゝる

蓮乃実を嫌くみしハ蓋れ新庵　風洗

古今戦

首塚や人とのかゝ友かよひ　山居

霞月十分懐旧けんを

却花ごきも花橘けむりし式　其角

述情

此秋を行に年よる雲雪　蓮

あそぶ事三千迄に軽事の秋　八橋

毎智月にうりて

三井寺へ来りて

兄弟といふ事親しき老の秋　乙丹

葉かくれてもなほ鶴の深雪哉　師坡

古足袋乃罕ふりしを踏込姫　嵐香

画賛　骸骨の画に

掘つまや点乃ときつの花の穂　蓉

源氏乃画に

傘持て月におくるゝ姿うゝ物　更角

傘持の小所乃画

霞にかゝり傘持の下みるゝくるゝ物　かしく

相女の画に

とれすを思ふて居るゝて園の月　鬼貴

人丸の画に

月花の境なりけるを御年まへ　才磨

三夕乃画讃

槇たつ背戸川山乃夕かな　其角

秋とハ法師をかしれぬ夕かな　宗因

秋あかる苫屋乃村はつれ　嵐雪

寒山の画

寒山や大鼓申まする寺の声　素堂

筆かしや毛も打しらぬ無也の墨　翁

寒しらし桐乃一葉や箒の声　其角

画讃ハ化の句（的）をつくるへし

秋とのおしむとへ其乃をしミ芭蕉葉　翁

此句ハしは雑集ニ東坡の賛ハしおせり

自乃句にしていそ賛ならてしや芭蕉庵

天霜しいふる語を反将もして庵更乃

句なり又いふ

此の中に芭蕉も枯かなかしおゆうたに

草ともる由へ其此の中よりぬといへきものゆ

あるし此中にかしあらわれ賛なりなるへし

[illegible]

[illegible]

黄色や柳はしろ藪のまへ　蘇

谷月の夢は上り松の陰　其角

[illegible]

[illegible]

志らしと[illegible]　[illegible]

[illegible]

命ず押[illegible]柳[illegible]　蘇

湖の[illegible]五月雨　去来

[illegible]

葉のもしさし[illegible]　蘇

[illegible]　湖春

[illegible]

山路来[illegible]何[illegible]　蘇

[illegible]　支考

いまるこうひ詩を此梨まして新源のさ[illegible]
やまに紀ゆ人乃さあやまに紀なく見ぬ川
うらあしの葉一句此若ゆ葉ひたりを
祖蘇もゆされし初より如新志の如く
いふ字ゆ葉川みなく葉まるはあしく
なれ下の書にくまし

一作詩る句

床に来て新ゆいるやきりくまを　蘇

馬

此る春の花枯野乃山風の姫　曲翠
作ふましむ詩しく一作は一句はちうら
あるべし　あと下は書をくましとまを
手を離るる句

春乃秋は様ふ明るく仕舞り　蘇

秋桂ゆ　菱は うき橋かしらなり　丈角
くりしといひたりぬ是句　百句一句は猿と
知る面し是等は句は深く却ひ入る面
夜明せ面句くれ此句となりけり

さし波やまし乃入口ヶ弱しめく
花らは雪根乃花をうん根の根
此歌を作しあひてあるいと
中されたり

田文

松乃木は雪やきやきやきあまれ乃つま　卜夷
たうし津波白しうる津しき　冰花

物名

鵜鷺雪鶴鸛琴拳鴨府

うけこん附日ハ松しとひきかり　菓峰
加茂雪根紀ハ瀬水腹淀
鴨しとてあ菓ハ世しかは淀　立吟
田文とのく名このとてきるゆゑあら
祝しこうくのなく古人乃句にはせさる
事ともあらせ　祝詞ゆゑひ
古哲乃遺法を用ゆるを我流とす
ぬるきをあらしむるなりたれ

炭氣ニ

小東ニ宮活の黄花ニ[illegible]

材ニ[illegible]ニ[illegible]ル蓑ニ[illegible]

[illegible]ニ[illegible]ル[illegible]

海川

嫡ニ[illegible]ニ[illegible]

[illegible]ニ[illegible]ニ[illegible]

汲さし[illegible]ニ[illegible]

活絡乃[illegible]ニ[illegible]

[illegible]

時分　昼夜　且暑ニ[illegible]

[illegible]

時節　四時[illegible]

[illegible]

天相　日月　陰晴乃[illegible]

[illegible]

其場　登山　海川　[illegible]

杭　四五年門乃[illegible]

其場乃[illegible]

志や伊賀乃上野あるけ哉ゆく中おもれ
し祖翁乃句なるを

伊氏下

日なりしたまゝなるふ須戸の八ツ木の様子の
うれ候ゑ老くいろくのゝ御用しかさる
るゝ多くかく
かくかくると思ひ、かゝる世あひて句意可
老木若木の穂背とのふ清きなれ為ひなら
さるを知るへし

四河風

表風下帯也みてる庫裏哉　鉞人
東風ゆやうなれなら病沒さるへ　野堂
表あらし定る河の苗の色　嵐書
日とおうむ海人うゐるゝ也初風　空
けうし野や鮑乃夜ゆく秋の風　照童
けうしてきへ海也く聖ゝ哉　朧雖
木うらし下二日乃月乃次夜哉　荷芋

四河雨

表雨の木下と傳ふ来哉

芸の中に米はし　五月は金の下　氣角
夕立や檜の葉の花を忘きて　及肩
姉に雅本松なるに　秋の雨　尚白
味噌を酒にこしたる　春時雨　北枝
下松のたゆしときなる時雨の花　湖夷

四季月

穢しき松は黒さふ月粉に　其角
清水の上から出る春の月　伴六

市中は物の白ひや夏の月　凡兆
盆は月庭にうつる門を却き　野坡
尾姉に泉も雨日や秋の月　聖秀
待宵の姉に見へけるの若速　其角
名月の池を巡りて秋も去から
雅望はしらい若寒はしめ
鶴は夢をしらしや後の月　一伴
此本戸の鎖のさしきて冬の月　其角

我里に志ひしを清き郎云
人にも有しを見ておもしきとも
和歌ともかゝる哥是あしくとゝ後哥
ゆゑ[illegible]も侍る也
貞九 故事に法ゝる事
梅ゝ香や是も家にて近きとの
桃原我に
遠くて近きことの梅栗にて和の道を得
を思ひ何るせし志ゝ八何程とも出れも

のも家ゆゑ全く古事に法ゝる也為之
古事に法ゝるもさる説句上巻に
卯の家ゆゑ也の即所の加茂緒 貞角
卯のも蓋なる法ゆゑやこゝ[illegible]ゆき人の行ゝ也
見ゝ法ゝ如ゝ付るきにしゝ而加茂緒の云るさな
るゝの家事と思ひ何るせし之是古事を
法ゝるゝ事ゝ[illegible]
木ゝ[illegible]や撞ゝ[illegible]
桃原へ人に[illegible]
人[illegible]
しなるべし[illegible]

其十五上五としにてしたりある局の
もとに何れへかとゝ居る爲領の書
野へ出る馬骨に落れ多き
こゝゆゑにこゝにてこゝにいりきと
行馬何れにまゝるそ枝の書
道は近の馬骨に露の多き
なしに並のこゝにしたりしめれこゝにしたりあるを
おりに居し

其十六三人に應せさる句は事
縁縁は家をりさゝ居る枝を成
以屋しき女は句に小さきは縁縁の
の喜きく様は枝を成しけんにて
紙いひおし高も志りなべし

十賞は苞をまきとうそ落の蓋
ふきはしとを賣人は句なり此之の紙借
を見れしこゝ色ちは句いと安し本懷
をのふ屋まき紙借なりしをわきまへを
あゝ人にふきかせんとおどろこさんにて

[illegible]

大とも水にいひなしてはべ
[illegible]
と我とのふしぬなりいとなり
いふなり

工夫に俳をつくしいふるはは
[illegible]
いふ事にて物しさ里もてもしなりな
き事をいはんと△あしき句と祖蕉
門石は粗俳[illegible]

蛸 [illegible]

磯句

[illegible]のちかく石
[illegible]と一巻の発句と
[illegible]

紙諧寐梨絵

此三巻は書[illegible]祖蕉蔵遺稿也書[illegible]
[illegible]破の粗法を存